

# みすずかる 第16号

上信越道より上五明方面を望む

【トピックス】

坂城町

かみごみょうじょうりすいでんし  
上五明条里水田址

## 平安時代の八稜鏡発見!!



上:直径8cm、重さ14g。鏡の背面には鳥の羽の一部と思われる模様がみえる。(中央右)



上五明条里水田址では、前年度に続き4月から、平安時代後期(10世紀後半から11世紀初頭)の集落跡を調査しています。

調査が始まってまもなくの4月22日に、竪穴住居跡から、銅製の鏡がみつかりました。鏡は、住居跡中央付近の床面やや上から、床面と水平な状態で、鏡面(きょうめん)を上にしてみつかりました。一部縁が欠けている部分もありますが、ほぼ完全な形です。外形は八稜形で鏡面は平坦に磨きこんでいます。また、付近から鉄鐸(てったく)がまとまってみつかり、鏡との関連が非常に興味深いところです。

左:銅鏡が出土した竪穴住居跡の作業風景(撮影:南から)  
中央付近から八稜鏡(矢印)、その手前で鉄鐸が見つかる(破線内)。



# 特集：八稜鏡

長野県埋蔵文化財センター発掘調査より

よしだかわにし  
1 吉田川西遺跡 塩尻市 1985年発掘  
ずいか そうちよう  
瑞花双鳥八稜鏡 (国:重要文化財)

集落の北西側にあったお墓の副葬品です。棺(ひつぎ)や骨は残っていませんでしたが、東側の棺の外とみられる場所には、10世紀後半の緑釉(りよくゆう)陶器の椀や灰釉(かいゆう)陶器の壺などが並べられていました。一方、鏡は北壁近くで、絹の布に包まれ、漆の八角形(?)の容器に納められていました。その上には、乾漆(かんしつ)の四角い小箱があり、漆椀が乗せられていました。これらの出土品は、平安時代の副葬品を代表する例として、国の重要文化財に指定されています。(長野県立歴史館蔵)



径:11.1cm  
重さ:116g

## エピソード

吉田川西遺跡のお墓は、副葬方法がわかる状態で緑釉陶器が多量にみつかるといった超一級の資料でした。そのため、連日、調査終了時刻前には墓の周囲を土のうで嚴重に固めて鉄板をかぶせ、さらにその上に軽トラックを乗せ、夜間の盗難防止にあたりました。当時、土曜日の午前中は勤務日でしたので、休日を前に調査研究員だけで取り上げることにしましたが、慎重な作業のため、結局午後にはずれ込みました。午後の作業が始まってまもなく、プロ野球日本シリーズ第6戦の1回表、長崎選手満塁ホームランのアナウンスが、軽トラックのラジオから聞こえてきました。阪神悲願の優勝！1985年11月2日(土)のことでした。

みなみくり  
2 南栗遺跡 松本市 1985年発掘  
ずいか そうほう  
瑞花双鳳八稜鏡

11世紀半ばの集落南端で見つかった木棺墓(もっかんぼ)の副葬品です。木箱に納めて遺体の上に置かれていました。同遺跡では10世紀後半の竪穴住居跡でも熱を受けて変形した八稜鏡がみつかっています。(長野県立歴史館蔵)



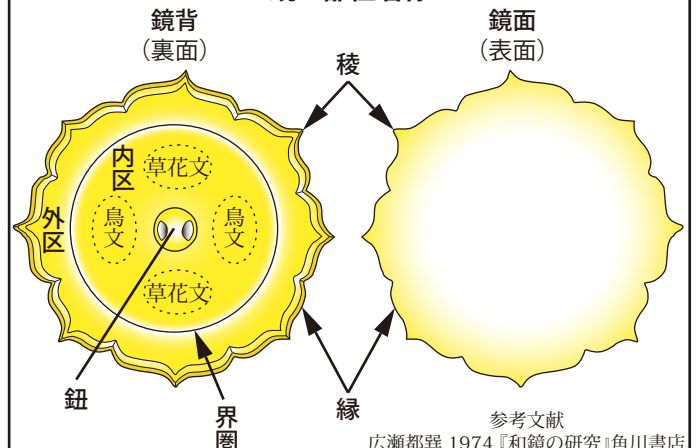
径:9.6cm  
重さ:114g

## 八稜鏡とは

『大鏡』第1巻後一条院条で「今の世。今の世のはやり」の意味で用いられた「今様の葵八花(あおいはっか)の鏡」こそが、藤原道長の時代(10世紀末から11世紀初頭)に流行した八稜鏡です。

八稜鏡とは鏡の縁(ふち)に八つの稜を持つ鏡の総称で、鏡背には浮き彫りふうに表示された文様があります。鏡背は、界圈(かいけん)がめぐり、内区(ないく)と外区(がいく)に分かれます。内区には、鳳凰(ほうおう)や鴛鴦(えんおう)などの鳥文と瑞花などの草花文を、鈕(ちゅう)というつまみ部を中心に左右対称に配置します。外区には、唐草文や瑞雲文を各稜ごとに配置するものを基本とします。この瑞花双鳥文の八稜鏡は平安時代を通じてみることができます。

### 鏡の部位名称



参考文献

広瀬都巽 1974 『和鏡の研究』角川書店



いしかわじょうり  
3 石川条里遺跡 長野市 1989年発掘

瑞花双鳥八稜鏡

平安時代の水田を覆う洪水砂の層より発見されました。厚さは計測できないほど非常に薄いもので、背面の文様もわかりづらく、発見当時はこれが鏡の一部かどうかもわからない状況でした。鈕をはさんで両側に直径3mm程の穴があけられていることから、この穴にひもなどを通して吊り下げたものと思われ、ご神体として祭られたのではないかも考えられています。(長野県立歴史館蔵)



径:6.9cm  
重さ:10g

くりばやし  
4 栗林遺跡 中野市 1991年発掘

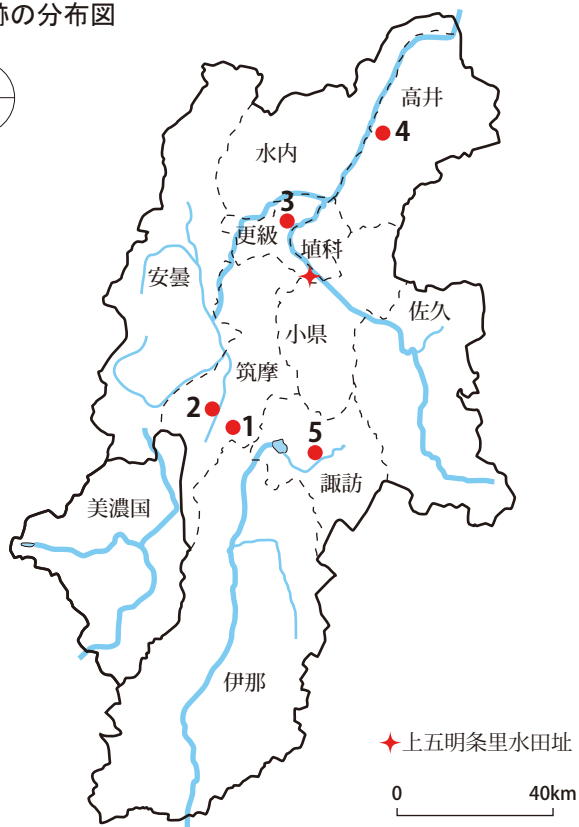
瑞花双鳥八稜鏡

平安時代の竪穴住居跡からみつかりました。出土位置は住居跡が自然に埋まった土の中からで、他所から流れ込んだ可能性もあります。文様は、鑄造(ちゅうぞう)の仕上がりがわるいため不明瞭ですが、よくみると草花の文様も認められます。(長野県立歴史館蔵)



径:7.6cm  
重さ:53g

紹介遺跡の分布図



なかむら そとがいと  
5 中村・外垣外遺跡 茅野市 2003年発掘

瑞花双鳳八稜鏡

平安時代のお墓に、八稜鏡2面が鉄鐸3点とともに副葬されていました。二つの鏡は瑞花双鳳文で、一つは木片が張り付いており、木箱に入れて副葬した可能性があります。錆などを落として保存処理をしたところ文様がかっきりと浮かび上がり、色調は緑がかってみえます。



径:11.0cm  
重さ:158g



「シンポジウム柳沢遺跡を考える」を終えて

長野県立歴史館で開催した速報展「長野県の遺跡発掘2008」の初日、平成20年3月15日に「シンポジウム柳沢遺跡を考える」を行いました。当日は歴史館講堂に入りきれない方々にも別室が用意される程の盛況で、320名の聴講者は笹澤浩先生・工楽善通先生の基調講演やパネラーの先生方の発言に熱心に耳を傾けていました。このシンポジウムの内容とともに柳沢遺跡から出土した銅戈・銅鐸を臨場感あふれる写真で紹介した「速報写真グラフ 北信濃 柳沢遺跡の銅戈・銅鐸」が信濃毎日新聞社から刊行されています。



銅戈・銅鐸のその後と今年度の調査

7本の銅戈のうち、九州型と確認された1号銅戈は遺存状況が著しく悪いため、早めに保存処理をする必要があります。長野県立歴史館での展示後、奈良文化財研究所に依頼して、保存処理を進めてもらいます。その他の青銅器についても伊那文化会館での展示後、順次、保存処理を進めていく予定です。

平成20年度の柳沢遺跡の発掘調査を4月17日から開始しました。調査区北部から発掘調査を実施し、調査区全体が青銅器埋納坑を発見した検出面まで掘り下げて、青銅器が埋納された時期の遺構配置などを探っていくことを第一目標にしています。その後、昨年発見された礫床木棺墓(れきしょうもっかんぼ)群などの詳細な調査をしていく予定です。並行して、金属探知機などを使って銅鐸の破片を探す作業も実施しています。



南信初公開!! 柳沢遺跡の銅戈・銅鐸

長野県伊那文化会館開館20周年記念  
長野県埋蔵文化財センター速報展

『長野県の遺跡発掘2008』

場 所:長野県伊那文化会館 入場無料

期 日:平成20年7月10日(木)から8月3日(日)まで

休館日:7月14日(月)、22日(火)、28日(月)

銅戈、銅鐸の出土で話題となった柳沢遺跡など、平成19年度に調査した遺跡の出土品をまとめて展示します。あわせて、「伊那谷の弥生時代」として伊那谷の弥生時代遺跡出土品も展示します。是非、この機会に御覧下さい。



出版物のご案内

○信濃毎日新聞社刊行

『速報写真グラフ 北信濃 柳沢遺跡の銅戈・銅鐸』

定価:本体952円+税、県内書店で販売されています。

○長野県埋蔵文化財センター刊行

発掘調査報告書83 伊那市内『東高遠若宮武家屋敷遺跡』

江戸時代の絵図と符合した武家屋敷跡

発掘調査報告書84 茅野市内『構井・阿弥陀堂遺跡』

縄文時代前期から平安時代の集落跡

野 帳

今回は銅鏡の中でも当センターが調査した遺跡から発見された「八稜鏡」を紹介しました。これら以外に県内では南は木曾谷、北は栄村など各地で発見されています。また、鏡には時代ごとにいろいろな種類があります。形、大きさ、描いてある模様などによって様々な名前もついています。今年度南佐久地域で古墳の調査が行われてます。鏡の発見も期待したいところです。

タイトルの由来:「みすずかる」=御簀刈る。

御(み)は次に続く文字に尊敬や丁寧の気持ちをこめる意。簀(すず)は篠竹(すずたけ)の意。刈るは刈り取るの意。篠竹が信濃に多く採れることから、地名の信濃に係る枕詞(まくらことば)として慣用される。(『古語大辞典』小学館より引用)

財団法人 長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田 963-4

TEL 026-293-5926 FAX 026-293-8157

E-mail maibun@grn.janis.or.jp

HP <http://www.grn.janis.or.jp/~maibun/>